

学位論文審査の要旨

学位申請者	高橋 加織 ジェンダー学際研究専攻2017年度生	論文題目	経済のグローバル化の下での越境的接客労働とジェンダー ——クアラルンプールにおける現地採用日本人女性ホテルスタッフの事例——
審査委員	主査:	大橋 史恵 准教授	学位論文の全文公表の可否： 否 「否」の場合の理由 <input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある <input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている <input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について
	副査:	水野 勲 教授	
	副査:	倉光 ミナ子 准教授	
	審査委員:	斎藤 悦子 教授	
	審査委員:	堀 芳枝 教授 (早稲田大学)	
学位名称	博士 (社会科学)		
(英語名)	(Ph. D. in Social Sciences and Gender Studies)		

学位論文審査・内容の要旨

<p>本論文は、マレーシア・クアラルンプール大都市圏に立地するインターナショナル・ホテル・ブランド傘下の高級ホテルに勤務する現地採用の日本人女性スタッフの労働についての実証的研究である。マレーシアは1980年代以来、日本や韓国の経済成長を模範とする「ルック・イースト」政策を採ってきた。とりわけクアラルンプール大都市圏では、2000年代の日本とマレーシアの経済連携の強化によって、日系企業の集積が進んだ。同時期に誘致されたインターナショナル・ホテル・ブランドの系列ホテルは、その高級イメージを保ちつつも、相対的に安価な宿泊を提供している。経済のグローバル化の下で現地に進出する日系企業は、こうした高級ホテルを日本からの出張者の宿泊や接待に活用してきた。日本のビジネス慣行において出張者は男性によって占められており、高級ホテルでは、日本人女性スタッフが専ら日本人男性顧客を対象に日本語で接客サービスを行うジェンダー化された構図が成立している。本論文は、企業の越境的経済活動に応じて要請される対個人サービスを、顧客と同じ言語文化圏出身の移住労働者が担っている構図を「越境的接客労働」ととらえた。その上で、接客サービス労働過程論における研究の蓄積を援用し、労働者-顧客-管理者の3極関係を、越境性やジェンダー関係とからめながら考察した。</p> <p>この研究にあたり、2015年4月から2021年6月にかけて現地フィールドワークが実施された。期間中には、クアラルンプール大都市圏のインターナショナル・ホテル・ブランドの高級ホテルで働いた経験のある日本人女性計10名に対して半構造化インタビューが行われ、彼女たちがマレーシアで就労するに至るまでのプロセスや勤務状況の詳細が把握された。本論文の考察はこうした長期的な観察と現地働く日本人女性たちの語りに基づいて組み立てられている。</p> <p>論文はクアラルンプール大都市圏の高級ホテルで働く人々の、国籍、エスニシティ、ジェンダーに基づくヒエラルキー的な組織関係を描き出し、そのような関係がマレーシアの出入国管理制度と結びついていることを明らかにした。接客業務にあたる日本人女性たちはこのヒエラルキーの中位において、2年間の就労ビザを取得し、2年間の雇用契約を結んで働いていた。これに対して清掃など肉体労働に従事する人びとは、より不安定な在留資格でマレーシアに暮らしており、日雇いでホテルの仕事をしていた。日本人女性たちは短時間で多くの仕事をこなす清掃労働者の状況をよく知る立場にあり、その業務をカバーして働かざるを得ないこともあった。また日本人女性たちの多くは、リブイン(住み込み)で働いていたが、それは中抜けという不自由な勤務体系や24時間のオンコール勤務をもたらし、労働状況は過酷化する傾向にあった。そのため日本人女性スタッフの離職・転職率は高かったが、代替労働力は常に補給された。マレーシアで就労する日本人女性たちは、(1)人材紹介会社、(2)インターンシップ斡旋企業、(3)直接採用の3つのパターンで仕事をしていた。とりわけインターンシップを経由しているケースは多く、日本人女性たちの越境的接客労働が、教育段階におけるインターンシップの奨励によって支えられているという構図が見いだされた。本論文はこうした実態把握の上で、越境的接客労働における3極関係のあらわれかたを、女性たちのミクロな経験から描き出した。その結果として、彼女たちの労働関係がマレーシアにありながらも日本企業の労働慣行を再現する「飛び地」的な性質をそなえているという点を実証的に明らかにした。</p> <p>審査委員会は2023年6月20日と2023年7月11日に開催された。審査の過程では越境的接客労働という概念の精緻化とその概念に照らしたオリジナルな分析枠組みの提示が求められた。また背景となる日本とマレーシアの経済連携や、日本人女性たちの移動パターンの実態解明について、大幅な修正が必要とされた。これらの修正が適切になされたことを確認した上で、2023年8月25日に公开发表会と最終審査会が行われた。審査では、本論文が経済のグローバル化の下で越境的接客労働を行う日本人女性たちが「飛び地」的な状況におかれているという実態を適切に描き出したことが評価され、博士論文の水準を十分に満たしているという点において審査員全員の意見が一致した。</p> <p>以上を総合して、本審査委員会は、本論文を、本学大学院人間文化創成科学研究科における博士(社会科学)(Ph. D. in Social Sciences and Gender Studies)の学位を授与するにふさわしいと判断した。</p>
--